
WALK THE SKY!

06と愉快的仲間達

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W A L K T H E S K Y !

【Nコード】

N 5 8 9 3 T

【作者名】

06と愉快的な仲間達

【あらすじ】

モテモテの学園生活を送る空^{そら}だったが、突然、異世界へと転移してしまう。

元の世界に戻る方法を探しながら、旅をすることに決めた空は、王国に目を付けられ……。

ほのぼの異世界ストーリー！

一話（前書き）

二回目の投稿は遅くなります。

一話

今、部屋にいるのは、俺と俺の彼女の沙良。

自分で言うのも何だが、学業優秀、スポーツ万能、見た目も中々で、最近は女子に囲まれる事が何かと多い。

しかし、俺は最近まで女子というものに、全くと言っても良いほど興味が無かった。それどころか、気が付けば、体が女子を拒絶してしまうようになっていた。いや、別に女が嫌いと言うわけではないのだが、言葉を交わすだけでも身が竦み、偶然にでも触れられなどした時には、酷い場合は気絶してしまうほどになっていた。

こんな状態の俺にとっては、学校生活など、苦痛以外の何物でもなかった。だから今まで俺は、女子と付き合うということをしたことが無かった。

そんな俺を変えたのが、沙良だった。簡単に言えば、（俺の記憶の中で）初めて触れる事ができた異性が沙良なのだ。

何故か、沙羅が相手だと寒気も気絶もしない。

そんな彼女と俺は今、同じ部屋にいる。

それだけ聞けば実に微笑ましく聞こえたかもしれぬ。しかし、事態は極めて深刻。何故なら俺は、彼女の手によって、『殺されているのだから。』

「ぐ……。何で……」

そんな俺の問いに、沙良は自らの指をさらに絞めることで応えた。

「空がいけないんだからね？ 私に許可なく他の女子と話したりするから……」

彼女は俺に跨り、全体重を乗せて俺の首を絞めている。

いくら沙羅が軽いと言われても、人一人分の体重を首に掛けられては、逃げ出すことも出来ない。

「……」

「だからね、私、考えたの」

沙良の指に再び力が籠る。

「じゃあ、いつそ、誰とも話せなくしちゃえ、ってね」

そう言つて、俺の上で沙良は嬉しそうに笑う。但し、俺の喉に指を食い込ませたまま。

「……ぐ……」

確かに今日、俺はクラスの女子と二言程度、言葉を交わしていた。とはいえ、それ位の会話ですら俺は耐えることは出来なかったが。つまりは、沙良の強すぎる嫉妬と独占欲であると俺は予想した。そして俺は、最後の抵抗をしようと沙羅に手を伸ばす。が、時既に遅し。俺の体内に残る酸素は完全に足りなくなっていた。

薄れゆく意識の中で、俺は思った。

（こいつ、ヤンデレ属性か……！）

間もなく俺は、意識を手放した。

私はその日、いつものように、空を教室まで迎えに行った。

すると、やっぱり、沢山の女子たちが教室の前で空の事を眺めていた。いつもなら私は空をわざと呼び捨てで呼んで、負け猫共に、空は私のモノだって見せ付けながら帰る筈だった。だって、空に触れるのは私だけだったから。

その日も、いつもみたいに空を呼ぶために教室を覗き込んだ。でも、そこで私が見たのはとても許し難い光景だった。

それは、空が、私だけの空が、事もあるうに、女子が落としたペンを拾ってあげていたところだった。私以外の女子のを、だ。そして、空はその子に話し掛けた。その子は平静を装っていたけれど、計算高い目付きで空の事を見ていたのを私は知ってる。

許せない。空も女も。

空に触れて良いのは私だけなのに。空と話して良いのは私だけなのに。空の事を見て良いのは私だけなのに。

許せない。許せない。

もう、許さない。

それから私はあらゆる手段を使って、あの女の家を突き止めた。

空の家から五キロも離れていなかった。

そして私は犯罪を犯した。

女の家には火を点けたのだ。

誰もいない時間帯。目撃者は——いなかった。

私は事が終わった後、迷わず空の家へと向かった。

木造の一階建てで、とても広かった。別に、お金が目的で付き合っている訳ではないけれど、間違はなくお金持ち。いままで空の部屋には一度だけ行ったことがあったから迷わなかった。

空の部屋の戸もやっぱり木製で、鍵はついてなかった。

私は取手に手を掛けた。

私は、完全に呼吸の止まった空に跨がったまま、その愛しい寝顔を眺めていた。

「空……」

頬をほんのりと朱に染め、私は空の額に口付けをした。

空の身体と自らの身体を重ね、目を閉じる。

ゆっくり、自分と空の鼓動が同調していくのを感じながら、私は眠りに落ちた。

やがて、私が目を覚ました時、空はどこにもいなかった。

一話（後書き）

協力者紹介コーナー！

小説を書くにあたって、僕をサポートしてくれる人を紹介します！

いえくらるけい
家倉流刑

作品数

あれ？ 何個だっけ？

気になった人は今すぐチェック！

コメント

高校のクラスメイトですね。僕と同じく、オタク主義です。

二話（前書き）

登場人物の紹介をします。

名前

人物像

性別

種族

誕生日

年齢

職業

属性

特殊能力

篠原空^{しのはら そら}

色々あって、異世界に転移してしまった少年。道端に倒れていた所を、心優しい女性に助けられ、そこが異世界だと知る。元の世界に帰る為の方法を探し、旅をする。女の子が苦手。大地や大気に宿るマナを操る事が出来る。この物語の中心人物。

男

人間

八月八日生まれ

十五歳

高校生（一年）

勇者属性

マナを操る能力

さく井い
櫻井沙良

空の彼女。嫉妬から、空を殺し掛けてしまう。空のことを心から愛している。

女

人間

十二月三日生まれ

十五歳

高校生（一年）

ヤンデレ属性

なし

マリア・リート

道端に倒れていた空を助けた女性。薬屋を営んでいる。

女

ハーフエルフ

誕生日未明

約四百歳

薬屋

魔法使い属性

若返り

二話

（ここは……？）

目を覚ました僕は、その目を瞬かせた。

仰向けに寝ているのだから、最初に目に映ったものと言えば、もちろん天井だ。わりと年期の入った、古い木造の天井。そして、それは同時に、懐かしさや安堵感といった安らぎを、僕に与えた。

僕は、見つめていた天井から、ふと視線を横に落とした。そうして初めて、僕は自分が布団に寝かされていることに気が付いたのだった。

「……………」

上半身を起こして、周りを見渡した。

一見、普通の和室のように見えたが、僕が寝かされている布団の右手には、磨りガラスの引き戸があるのが分かる。その向こうは見えないが、その戸の向こうからは、何やら騒がしい様子が伝わってきた。

気になった僕は、そつと戸を開いて、隙間から向こう側を覗いた。狭い視界に、まず映ったものは、大きな鍋2つ。その向こう側に、鎧を着た男が二人。そして、鍋のこちら側に女の人が一人だった。

三人は大きな鍋を挟むようにして、談笑をしているようだったが、男たちは一際大きく笑ったかと思うと、左側の男が懐に手を差し入れて、黒い財布を取り出した。それと同時に、彼女は視界から外れた。

男たちは互いにニヤニヤしながら、彼女が戻ってくるのを待った。しばらくすると、彼女は戻ってきて、右の男に、掌に収まる程の小さな袋を手渡した。右の男はそれを受けとり、喜びの表情を、左

の男は逆に苦笑いを浮かべた。左の男は手元の財布から小銭を取り出した。彼女はそれを受け取って、少し数えるような仕草を見せた後、机の上の四角い箱にしまった。

彼女が礼を言つと、二人は再び笑い合いながら、どこかに歩いて行つてしまった。

彼女はその後、それを笑顔で見送つていたが、やがて、自分の肩を二三回叩いて、こちらに向き直つた。

それを見た僕は、慌てて布団に戻り、目を閉じる。しばらくすると戸が開き、彼女が歩いてきて、やがて僕の横に座つたのを感じた。

「はあ……」

彼女が寂しげな溜め息をついた。

「できることはしたんだけど……。どうにか目を覚ましてくれないものか……」

もちろん僕は起きているのだが、そのことに彼女が気付いた様子はなかった。それどころか、本気で僕を心配しているようだった。

「はあ……」

僕は罪悪感に苛まれ、「ごめんなさい！」と飛び起きたい衝動に駆られたが、次の瞬間には、それもできなくなつてしまった。

彼女が不意に僕の上にのし掛かつてきたのだ。彼女はやや緊張と興奮の入り雜じつた声でこう言つた。

「こうなつたら……やっぱり『キス』しか無いのよね……」

僕は貞操の危険を感じ、思わず目を開けた。

視界一杯に広がる透んだグリーンの瞳。唇は――触れていない。
セーフ！

彼女は二度だけ瞬きをした後、僕の上から無言で退いた。

「……………」

そして、二人の間に沈黙が訪れる。

互いに息が詰まるほど重苦しく、そして気まずい沈黙。

それを打開したのは、僕でも彼女でもなく、店の方からの、客が彼女を呼ぶ声だった。

「おい、マリアさんいるかい？」

僕はこの時、彼女の名前が「マリア」だと知った。

「あ、はい！」

彼女は反射的にさっきまでの事をまるで感じさせない様な明るい声で返事をして、この間から出ていった。

やがて、十分程接客をした彼女は、何を言われたのか、頬を朱に染めて戻ってきた。そして、僕の見る前で静かに正座をし、そのまま指を畳に着けた。

「…………ごめんなさい」

と彼女はゆっくりと頭を下げた。

その動作がやけに美しかったこともあり、僕は暫く停止した。やがて、彼女は頭を起こして、僕を見据えた。

その視線に気付いた僕は、やっとのことで重い口を開いた。

「……あの」

「何？」

彼女の返答の速さに一瞬ビビった僕だったが、再び話し出した。

「ここはどこですか……？　僕は一体……誰なんでしょう？」

すると、彼女もややためらった後、口を開いた。

「私はマリアよ。ここは王国の端の村にある薬屋なの。もしかして記憶が無いの？　貴方は……」

そこで、彼女は再び言い淀んだ。そして、意を決したように僕の日を見て、言った。

「いきなり空から落ちてきたのよ」

三話

「えええ！ 落ちてきた！？」

宣告された全く予想外の言葉に僕は目を剥いた。

が、マリアさんは僕が目を覚ましたことによって、興奮しているようで、先程までとは打って変わって、僕のことを気にした様子もなく、淡々と喋った。

「そうよ。全く、貴方を蘇らせるのに、どれだけの時間と薬が掛かったと思ってるのよ。二ヶ月と金貨二枚分よ？」

僕には金貨二枚がどれ程の大金かは分からないが、きっとヤバイのだろう。

「す、すみません……」

思わず謝ってしまった僕。

だがその瞬間、マリアの表情は怒りから恥じらいへと切り替わった。

「で、さ……。仕方無いから、蘇生の最高魔法を試そうとして……」

さっきの展開。と言っわけだった。

(マリアが言った『キス』とは、呪文の略称らしい)

ここで再び僕の頭に疑問符が浮いた。

「……魔法？ 魔法って、あの魔法ですか？」

マリアはその問いに、さも当然の事とでも言わんばかりにきよんとして、答えた。

「他にどの魔法があるのよ」

「え……じゃあ、火とか？」

「私の専門外だからあまり使えないけど、火種位なら……ほら」

そう言うマリアの指先にはライターのように、火が浮いていた。

「す、すげえ……」

そんな僕の眩きを聞いたマリアは、怪訝な顔で僕を見た。

「もしかして貴方、この世界の人間じゃない？」

「え？」

「ふう〜ん。聞いたことはあったけど、ホントにいるとはね……。確かに空から落ちてくるとか、ありえないし」

彼女には妙に納得されたが、僕はまだ話が見えていない。

「異世界人って事は……貴方も能力能力とか持ってるの？」

「の、能力？」

「そ、こいつの」

言っている傍からマリアは目を閉じた。すると、僕の見える前で、マリアの背が縮み、他の部分もそれに連れて退化していった。やがて、二十代後半だったマリアの外見は僕と同じ年代に落ち着いた。

「……ふう！……分かった？　これが私の能力」

「そ、そんな……。ち、小さくなった……」

「そ。私の能力は『若返り』なの」

どうよ。とばかりに、小さくなった胸を張るマリアさん。

「魔法に能力……何なんだこの世界……」

「あ、魔法は練習すれば大体の人が使えるようになるけど、能力の方は遺伝的なものがあるから、みんな持つてる訳じゃないのよ？　ここ重要」

人差し指を立てて僕に突き付けるマリアさん。

「はぁ……」

僕は取り敢えず返事をする。すると、マリアさんは満足したように笑った。かと思うと、今度は頭の上にハテナマークを出現させて、首を傾げた。

「あれ？　あんた、名前何？」

「そう言えば……」

覚えていない。自分が誰で、どこから来たのか。

「名前が無いんじゃない、不便ね……」

腕組みをして、悩む素振りをするマリアさん。

「そうだ！」

良いこと思いついた、と、マリアさんは頭の上に浮かんでいたハテナマークをビックリマークに変えた。

「私が付けてあげるよ！ 名前！」

次に頭にハテナマークを浮かべるのは僕の番だった。

「えーと……それはどういう……」

「うーんとね、じゃあ、空から落ちてきたから『ソラ』ね！ 決まり！」

僕の疑問には耳も貸さず、勝手に僕の名前を宣言して、マリアさんは今日一番の笑顔を僕に向けた。

マリアさんがはにかむと、かなりの美少女だったが、僕は何故か抵抗感を覚えて、思わず後ずさった。

瞬間、マリアさんの顔が少し歪んだ。

「……何で逃げるの？」

上目遣いで悪い笑顔になるマリアさん。

それは、一般男子ならば襲いかなない程の小悪魔的な魅力があるんだろうが、僕は只単に寒気を覚えた。

「ひ……」

僕は情けない悲鳴と共に布団から這い出て、そのまま這っていった。が、それがいけなかった。

建物の関係で、この間には出入口が一カ所しか無かったのだ。そして、それは今、マリアさんの後ろにある。つまり、僕は自ら袋小路に逃げ込んだことになる。

「ふふふ……。もう逃げられないわね。……あら、こうして改めて見ると、可愛い顔してるじゃない」

マリアさんが両手の指をワサワサしながら、僕に少しずつ近付いてきた。

「こ、来ないで……」

僕は後ずさろうとしたが、もう、後ろは無い。

「あら、人にモノを頼む態度じゃ無いわね？」

マリアさんは嬉々として、僕にそう言った。

「来ないで……来ないで下さい！」

僕は最早、目に涙を溜めていた。

「あらあら、泣いちゃった」

マリアさんは同情してくれたのか、指の動きを止めた。が――

「……もっと泣かせたくなっちゃった」

――再開した。

「こ、来ないでええ!!!!」

四話（前書き）

何がしたいんだ僕は？

同じ話を何度も何度も……。

まあ、定期更新のついでだと思って下さい。

四話

「ふへへへ……」

私はソラの守りに入った両手首を掴んで左右に開かせた。

「も、もう止めて下さい……」

泣かせたい。と言うか、鳴かせたい。何故だろう？

彼を見ていると、イジメたくなってしまう。

私は掴んでいた腕を放し、即座に完全にノーガードになった彼の脇腹をくすぐった。

「ひあつ……！ は、放し……」

力の入らない腕で無駄な抵抗をする彼。私にとって、その弱々しい抵抗は、まさに火に油。

「ふふふ……。そんな声出して……可愛いわね」

私はくすぐるのを止めて彼の脇腹を指から解放した。すると、彼はすぐ気を取り戻し、私の下から逃げるように這い出た。

でも、既に私によって長時間くすぐられている彼は、疲労困憊、体に力が入らなくなっていた。

元々、長期間眠り続けていたのだから、彼の体力は当然落ちている。つまり、今の彼は歩けないのはもちろん、這うこともままならない状態なのだ。

だから、私を振りほどいただけて力を使い果たして、に床にへばってしまふ。

当初の目的は、彼を肉体的、精神的に弱らせて、彼の特殊能力を引き出す、という物だったのに、今の私は、それを完全に忘れて、彼をイジめることしか考えていなかった。

そして、彼が私を恐怖に染まった目で見上げた瞬間、私の中で何かが弾けた。

……自分の事ながら、この時の私の顔は、本当に怖かった。

しかし、今まさに飛び掛からんとする私に、不意に声が掛かった。

「……マリア。お楽しみの途中で悪いが、今日は急ぎなんだ。ちょっと相手してくれ」

慌てて振り返ると、そこには顔馴染みの商人のトムが立っていた。

「よう」

「あれ？ あ……。あはは……」

一瞬で正気に戻った私は、涙を流しながら、床に力無く倒れているソラを見て、それからトムに愛想笑いをした。

「その子、お前の子……じゃあ無いよな。拾い子だろ？」

トムは注文表を取り出しながら言ってきた。

「……そうよ」

流石は商人。

多分、トムは分かっている。彼がこの世界の人間じゃないということ。

「やっぱりな。何せお前は……。いや、止そう」

私はトムに指定された薬を取りに戸棚に向かった。

「そんなことより、お前のその姿だ。……また能力を使ったのか」

私は薬を探す手を止めた。

「国の許可無しに能力を使うのは処罰の対象だぞ。分かっているのか？」

私は黙っている。

「お前だけならまだ良いが、今度はそうはいかないだろう。……騎士が来るぞ。そんな小さい子まで巻き込む気か？」

「……この子を巻き込むつもりは無いわ」

視線は薬棚に向けたまま、私は言った。
すると、トムは大きく溜め息を吐いた。

「そうかい。だったらその子連れて早く逃げるんだな」

「……はい、これ。銀貨二枚で良いわ」

私はトムに注文された薬を手渡した。そして、私はトムの目を見据えた。

「私は逃げない。この子は私が命に代えてでも守るわ」

「そうして、自分と同じ道を歩ませるのか」

そう言つて、トムは私を見た。

「言つておくぞ。それは絶対に無理だ。その子はもっと大きな力に導かれているはずだ。お前の思い通りにはならない」

「……………」

「間違いなく、やつら騎士団は後二日で此処へ来る。それでも逃げないんだな？」

私は無言のまま頷いた。

トムは納得しない様子で私に銀貨を渡した。

「……………まいど」

私がそう言うと、トムは何か言いたげな表情のまま、道に留めてあつた自分の馬車に飛び乗った。

「困ったことが有れば、何時でも言つてくれ」

そして、トムの馬車はゆっくりと店から遠ざかつていった。

彼の馬車が見えなくなつた後、私は店を閉め、居間に戻った。

居間の隅では、彼が丸く縮こまって、小さな寝息を立てていた。

五話（前書き）

長いことお待たせしました。

サボってました。ハイ。

夏休みと言うこともあり、時間的にも余裕が出来てきましたので、これからはもっと頻繁に更新が出来ると思います。

一通り謝罪が済んだところで、本編へどうぞ。

五話

マリアは、きっと逃げない。そうになると、王国の騎士軍丸々一個隊を相手取る事になる。しかも、ここ数年で騎士団は急に力をつけてきているようだ。あいつがいくら強いと言っても、能力を使った直後で弱体化している今、たった一人で勝てる訳がない。

……このままだと、遅かれ早かれ、あいつは殺される。

あいつは……あいつだけは絶対死なせたくない。ならば、俺は一体どうすれば良い……。

……そんなの、答えはもう出ているだろう。

俺は荷台を引く馬たちに再び鞭を振るい、進路を王国に向けた。

マリアは俺が護る。

全身がだるい。

まるで、服を着たまま海に放り込まれたみたいだ。

それでも僕は気を奮い起たせ、剣の柄をもう一度しっかりと握り直し、なんとか切っ先を地面から上げる。剣の重さは約五キロ。剣の中では軽い方でも、そもそも剣なんか握ったこともない僕にとつては、かなりの重さだ。

「今日はもう終わりにする？」

それを聞いた瞬間、手に握る剣が僅かに重くなったように感じる。

それでも僕は、最後の意地を以て首を横に振り、目の前に悠然と構えている少女を睨み据えた。

「良い眼になってきたわね」

少女が笑う。

「お陰様で！」

僕も笑う、つもりだったのに、限界ギリギリのこの苦しい状況下じゃあ、少し口端を上げることしか出来ない。

どうして僕が、こんなにもスタボロになりながら、必死に剣を構えているのか。

先ずは、そこから説明した方が良さそうだ。

六話

「さあ！ 特訓するわよ！」

「え？」

もちろん、理解できない僕。
一旦固まる空気。

仕方がないから、もう一度問うことにする。

「……え？」

「だーから、特訓だって、特訓！」

満面の笑みで僕の手を引くマリアさん。（ちなみに、僕の腕は何
故か鳥肌全開）

強引に引っ張るものだから、僕はとても歩きづらい。だから、何
度も転びそうになってしまう。

「ま、マリアさん、ちゃんとして行くから手を放して下さい……」

「やだ」

「やだ、って……。結構歩きづらいんですよこれ。……逃げたりし
ませんから」

「……」

マリアさんはちょっと惜しそうな顔をしながらも、やっと僕の手

を放してくれた。そして、フイツとそっぽを向いて、足早に進み出した。

「あ、ちょっと待って下さいよ」

でも、マリアさんは歩くスピードを落とさず、二人の距離はどんどん離れていってしまう。

「……ああ、もう！」

僕はとうとう駆け出した。マリアさんは、前方の林に分け入ろうとしているところだった。

視界からマリアさんを外さないように後をついて行く。

林の中は小さい木とかが結構生い茂っていて、僕は思うように走ることが出来ず、全く追い付くことが出来ない。焦れば焦るほど足が纏れて上手く進めない。

「マリアさん！ ちょっと待って下さい！」

マリアさんは遙か向こう、その姿は辛うじて木々の合間から見える程度だ。それでも声は届いたらしく、マリアさんは立ち止まってこちらを振り返った。

その隙に僕は歩を進め、何とかマリアさんに追い付いた。

「さて、今日はこれから戦闘訓練をするわ！ この世界で生きていくに当たって、必要不可欠と言っても過言ではない戦闘力。見たところ、貴方にはそれがない。だから、私が鍛えてあげる！」

ここはただっ広い草原。僕とマリアさん以外に人影は無く、時折、風が脛辺りまでもある草たちの頭を撫でて行くだけ。人影どころか生き物の気配すらない。

マリアさんは叫んだ後、鞘に収まった剣を、僕のいる方に向かって、投げて寄越した。それは、僕よりもやや手前に落ちると、短いながらも、鬱蒼うつそうと繁る草たちの上を滑り、丁度、僕の足元で止まった。

「……」

「何してんの？ 早く剣を取ったら？ じゃないと……」

マリアさんは僕に向かって掌を突き出す。

その瞬間、マリアさんの姿が眩んで消えた。

「死ぬよ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5893t/>

WALK THE SKY!

2011年10月8日13時47分発行